

特集：新規に開発された産業動物用抗菌性物質の基礎と応用

Symposium : The Properties and Clinical Application of New Antimicrobials for Farm Animal Use

今回のシンポジウムにあたって

小久江栄一（動物用抗菌剤研究会 理事長）

今年のシンポジウムについて、1月にメンバーが集まりテーマを検討した。いろいろな意見とテーマ候補が出たが、結局、新たに承認を受けた産業動物用抗菌剤について、その製剤の性格や使い方を各社から解説していただくことをテーマに選んだ。理事の中からは、新薬の紹介だけでは魅力に欠けるのではという意見も出されたが、新たに開発された動物用抗菌剤を会員に紹介し正しく理解することは本会の務めであり、設立の主旨にも適うことである、ということでそうなった。動物用抗菌剤の開発が華やかだった頃は、2、3年に一度はこのテーマでシンポジウムが開かれていたが、ここ十年近くこの企画がなく、未紹介の新製剤がかなりの数になったという背景もあった。シンポジウムで紹介された抗菌剤は、ペニシリン G プロドラッグの水産用トピシリン（武田シェリングブライアニマルヘルス；井上喜久治氏）、第三世代セフェムである牛の肺炎に使うセフキノム（三鷹製薬；渡辺典夫氏）、同じく第三世代セフェムで、牛や豚の肺炎に使うセフチオフル（ファイザー；岩隈昭裕氏）、フルオロキノロンで豚用のジフロキサシン（大日本製薬；松本修治氏）、ジテルペン系抗生物質で豚用のバルネムリン（ノバルティスアニマルヘルス；梶原敬太氏）の5つであった。

シンポジウムに先立つ特別講演では、国立感染症研究所の渡辺治雄先生に「FAO/OIE/WHO 合同ヒト以外の抗菌性物質の使用と薬剤耐性に関する専門家会議の概要」について、ご報告をいただいた。この専門家会議はWHOの主導で昨年12月に急遽開催されたもので、内容については非公開、日本からは渡辺先生がただお一人参加されたので、その分、貴重なご報告であった。飼料添加で動物に投与される成長促進用抗生物質により動物の腸管内に産生された耐性菌が人の腸管に定着し、公衆衛生上の危険をもたらすのではないかと提議について、世界中で十年以上も激しい科学論争が続けられてきた。当研究会でも、今年のシンポジウムで勉強会を開いた大きな関心事であった。合同会議では、「成長促進用として飼料添加で動物に投与される抗菌薬により動物の腸管内で耐性菌が産生され、その耐性菌が人の腸管に定着して耐性形質を人の腸内細菌叢に伝播することはあり得る」という結論が採択された。一応そういう結論にして果てしない科学論争は終えて、マネージメント（規制）面での工夫により、現実的な問題を処理するという方針なのであろう。WHOの思惑通りの決論、というのが渡辺先生の感想であった。